

二〇二二年度 日本近代文学会 秋季大会案内

◎二二日(土)

午後一時三〇分より

《開会の辞》

田中 励儀

《特集》近代日本の宗教と差別

―せめぎあう〈差異〉と公共性―

生の形式の臨界Ⅱ消尽と新たな〈生〉

―サバルタンと宗教―

友常 勉

遠藤周作の「弱者」再考

―「かくれ切支丹」表象の変遷を

視座として―

小嶋洋輔

被爆地「長崎」

―差別の輻輳―

篠崎美生子

現実と理想、分断と連携

―定住・定職に規定されない

生活を描く― ブルナ・ルカーシュ

《臨時総会》

《ソーシャルアワー》

◎二三日(日)

午前一〇時三〇分〜午後四時四〇分

《研究発表》

〔個人発表〕

「Hero」としての「男本尊」―坪内逍遙『小説神髓』「主人公の設置」を

中心に―

大橋崇行

内容から現象論へ

―1900年から1920年の

日本における手紙・ディスクールの

再考へ― ケビン・ニーハウス

『道草』における時間

―ベルクソン『時間と自由』との

接点から―

王 青

「或る女のグリンプス」から「或る女」まで

―嗅覚による内面世界の表現の獲得―

唐 銘遠

内田百閒「猫」と『新青年』

―初出雑誌の特性を視座として―

松原大介

バチエラー八重子『若きウタリに』の文体

―「連作」という視座から―

デイ・マルコ・ルクレツィア

小林秀雄と中原中也における〈哀悼〉の交錯

―テキストの〈推敲〉を視座として―

山本勇人

武田泰淳「審判」と上海現地メディア

―日本人居留民宣導政策と

その問題点―

藤原崇雅

戦争文学に描かれた「人間」とその美意識

―多田裕計「アジアの砂」論―

邵 金琪

寺山修司台本「盲人書簡(上海篇)」における

「暗闇」と言葉

劉 夢如

「G線上のアリア」を奏するとき

―二つの時代・言語にまたがる

台湾文学―

宋 元祺

〔パネル発表〕

戦前期『サンデー毎日』の視覚表象と文学

中村 健、荒井真理亜、三浦 卓、富永真

樹、副田賢二

地方雑誌から考える戦後文化

―『占領期の地方総合文芸雑誌事典』を

起点に―

石川 巧、大原祐治、牧 義之、渡部裕太

《閉会の辞》

島村 輝

※ 秋季大会については、必ず学会公式ウェブサイトで最新情報をご確認ください。